

会報二月号 意志よりも構造

目次

- ・意志よりも構造
- ・命を通す
- ・ Σ 響創マンダラは構造図
- ・変化（決断）
- ・ Σ 響創マンダラ↓各 Σ の基本定義のマンダラ

●意志よりも構造

2026年も一カ月が経過した。今年、新たな目標を掲げて歩み始めたはずが、立ち消えしそうだという話をチラホラ聞くようになった。「ガンバレ」と言いたいところだが、「頑張るぞ」と意志にだけ頼って進めるのは、本当に大変だと思う。何かを成し遂げるには「意志よりも構造で」と声を大にして何度も言いたい。その為の強力な視点やツールを来年度から「易经× Σ 響創マンダラ」というテーマで提供したいと思っている。

つまり何をしたいかという点、

- ①「 Σ 響創マンダラ」を「鏡」として用いて、
 - ②混沌や悩みを、命の原理から「構造化」して解き明かし、
 - ③その処方箋を道筋として示すということである。
- その目的は、「己の命を躍動させて使い切る」ためである。
今月はそのウォーミングアップをしておきたい。

●命を通す

Σ 響創マンダラの構造の前提として、「命を通す」という視点が重要なので、その点について少し語っておく。

「命とは何か」という問いを、感情や価値判断の話に落とすと、すべては歪んでしまう。命とは、元気でも気合でもポジティブさでもない。命の本質は通過だ。入ってきて、内で変換され、外へ渡される。この「流れそのもの」が命であり、生きているという実感は、この流れが滞りなく起きている感覚にすぎない。苦しさ、不安、迷い、

停滞、虚しさ、それらはすべて性格や能力の問題ではない。構造的にどこかで命が止められているだけだ。だから問題とは常に「命が通りたいのに通れない構造ができている状態」を指す。ここを見誤ると、人は自分を責めるか他人を責めるか運命を呪うしかなくなる。

●㊦響創マンダラは構造図

「命が通りたいのに通れない構造」、これを視覚化して処方していく。その為に使うのが「㊦響創マンダラ」である。これは思考整理法ではない。命が通るために必ず通過しなければならない関門を写し取った構造図である。①命はどこから来るのかという原理が㊦、②どんな器を通るのかという在り方が㊦、③どこへ向かうのかという志が㊦、④誰や何と共鳴し循環するのが㊦、そして⑤現実へ放たれる行為が㊦。これら㊦の㊦の中を自在に命は流れる。このどれか一つでも歪むと、命は詰まる、滞る。だから㊦で問題を紐解くとは、相手を慰めたり励ましたりすることではない。ただ「どこで命が止められているか」を特定する行為なのである。詰まりの位置が分かれば、命を流すことができる。水と同じで詰まりを取れば自然に流れていく。

だが厄介なのは、詰まりや滞りは本人には見えなくなりやすいという点だ。なぜなら「詰まり・滞り」とは、命が壊れないために自分でかけた非常ブレーキだからだ。これ以上傷つかないように、これ以上失望しないように、これ以上責任を負わないように、人は無意識に㊦のどこかを締める。①世界は理不尽だと決めれば㊦が閉じる。②自分はこの程度だと定義すれば㊦が縮む。③これ以上期待しないと誓えば㊦が切れる。④一人でいいと思えば㊦が遮断される。⑤今は動かないと決めれば㊦が止まる。これらはすべて「恐れ」を基準にした構造の操作であり、一時的には安全になるし安定する。だから人はそれを正しい現実認識だと錯覚してしまう。結果として、詰まりや滞りそのものが「正解」に見え、そこに問題があること自体が見えなくなりやすいのである。かといって、ここで気合や前向きさを持ち出すと事態は悪化する。詰まりや滞りは意志より深い層で起きているからだ。圧をかければかけるほど命はさらに弁を閉じる。だから「㊦響創マンダラ」は内面には踏み込まない、責めることも、評価することも、説得することもない。ただ外から構造を置く。「ここで止まっている」と示すだけだ。その時、人は理解する。「自分がダメなのではなく、配線が狂っていただけだ」と。この理解が防衛を解除し、認識を立体に戻す。視野が広がり、選択肢が現れ、時間が再び未来へ伸び始める。

●変化（決断）

詰まりや滞りは偶然ではない。守ることを選んだ結果だ。ならば外すことも選べる。その鍵になるのが、各㊦の定義の書き換えである。そして誓願だ。誓願とは気分でも希望でもない。「俺はどの命の側に立つか」を決めることだ。恐れを基準にした世界観を捨て、代わりに誓願を基準にした世界観へ跳ぶ。この切り替えが起きた時、㊦が

再起動し、㊦が立ち、㊧が定まり、㊨が開き、㊩が動く。㊪が点灯する。これが決断だ。決断とは選択ではない。切断だ。「逃げ道、保留、言い訳、どちらでもないという曖昧さ」を断ち切り、戻れない点を越える行為だ。だから決断は一瞬で起きる。迷いとは構造が二重化している状態にすぎない。片方を完全に落とすことが決断だ。時間は要らない。

本物の決断(命の流れを滞らせている㊫の世界観を反転させる)の後、世界が変わって見えるのは錯覚ではない。㊬が流路になり、命が迷わず流れるから、現実との干渉点が一気に増える。人や情報や偶然が集まり始める。これは引き寄せでも奇跡でもない。構造が通った結果である。だから決断には必ず不可逆性が伴う。評価が変わり、関係が変わり、生活が変わる。それでも行くこと引き受けること、それが覚悟だ。

結局、㊭響創マンダラがやっていることは一つなのである。それは、『命が本来持っている自己流動性を回復させること。』命は常に流れたがっている。世界と共鳴し、何かを生み、次へ渡したがっている。詰まりや滞りを見抜き、恐れ基準を斬り捨て、誓願基準へ切り替え、最小単位でもいいから不可逆点を一つ越える。その時、命は通り始める。「生きる」とはそういうことだ。命を守ることではない。命をこの世界に通し、渡し、燃やし切ることだ。

㊮響創マンダラはそれを助ける一助となることができる。

次のページに一つマンダラを載せておいた。来年度からの準備に少し目を通して書いてもらいたい。

今月も健康と健闘を。

